各地区の歴史と今

1　豊平地区
2　美園地区
3　月寒地区
4　平岸地区
5　中の島地区
6　西岡地区
7　福住地区
8　東月寒地区
9　南平岸地区

※地区の区分けはまちづくりセンター所管区域別

1　豊平地区

「トイェ・ピラ」。アイヌ語で「崩(くず)れかけた崖(がけ)」を意味する豊平川の川岸の一部の呼び名から「豊平」の地名がつきました。

安政 4（1857）年、札幌越(ごえ)新道（現在の国道 36 号の一部）の開削(かいさく)が行われ、そのころ、豊平川に渡船場を設け、通行屋（渡(わた)し守(もり)）として、志村鉄一(しむらてついち)が定住しました。この渡し場は「樋平(といひら)のわたし」と呼ばれていました。

旭町は、もともと「豊平○条○丁目」と呼ばれていましたが、昭和 25（1950）年に「旭町」と呼ばれるようになりました。この名称は、リンゴの品種にちなんだとも、また、町の発展の期待を込めて付けられたともいわれています。

水車町は、かつて、この地域に水車があったことから名付けられたものです。もともとは「豊平○番地」といわれていた地域で、大正時代には「水車通り」、昭和になってからは、「豊平川岸○丁目」と呼ばれていたこともあります。

明治 35（1902）年、3 村に分かれていた豊平・月寒・平岸の各村が、「豊平村」として一つになり、豊平地区には村役場が設けられました。その後、明治 41（1908）年に豊平町と改称され、明治 43（1910）年には、現在の豊平地区に当たる豊平町大字豊平村の一部が札幌区に編入されました。

写真 -1　最新調査札幌明細案内図（昭和 3 年）

大正 7（1918）年に定山渓鉄道が開通し、その後、豊平橋が鉄橋に架け替えられると、町の発展が進み、街道沿いには、馬具(ばぐ)屋、蹄鉄屋、運

送屋、飲食店など商店街が形成されていきます。また、昭和 4（1929）年、市電が定鉄豊平駅まで延長されたこともこの地域の発展に大きな影響を与えました。その後、地下鉄建設や交通量の増加などの影響で、昭和 44（1969）年に定山渓鉄道が、昭和 46（1971）年に市電豊平線が廃止されました。

平成 12（2000）年に留学生宿舎である札幌留学生交流センターと札幌国際ユースホステルの複合施設が開設され、国際交流の拠点となっています。

また、明治 19（1886）年に開設された豊平墓地の跡地に、平成 12（2000）年、北海道立総合体育センター（北海きたえーる）が開設されると、スポーツや音楽イベントなどが開催され、にぎわいを見せています。令和 5（2023）年に、全国高等学校総合体育大会が行われたときには、開会式の他、柔道やバドミントンなどの会場となり、全国から多くの高校生が参加し、熱戦が繰り広げられました。

写真 -2　北海道立総合体育センター（北海きたえーる）

地区内を通る国道 36 号には、昭和 42（1967）年、定山渓鉄道および市電豊平駅の利用者の安全確保を目的として豊平横断歩道橋が設置されましたが、定山渓鉄道や市電豊平線の廃止でその使命を終えたことや老朽化、利用者の減少から平成 27（2015）年に撤去となりました。また、国道 36 号の豊平 4 条 8 丁目から千歳間 34.5㎞の「弾丸道路」は、この道路で導入された技術などが、歴史的価値を認められたことで、令和 3（2021）年に土木学会の土木遺産に選奨され、豊平 4 条 8 丁目には認定プレートが設置されています。（47 ページ参照）

旭町には、明治 41（1908）年に北海中学校が移転しています。現在は、学校法人北海学園（北海高校・北海学園札幌高校・北海学園大学・北海商科大学：北海商科大学の所在地は豊平 6 条 6 丁目）となり、旭町は学園の街となっています。

水車町には、明治 30 年代から大正末期にかけて、豊平川の枝川（水車川）をまたぐように 7 軒の水車小屋がありました。小屋の中では、大人の背丈（せたけ）の 2 倍ほどの大きな水車が一日中回り続け、精米（せいまい）や製粉（せいふん）のための動力源として使われていました。

写真 -3　復元された水車小屋

昭和初期に、電動の機械が導入されると、水車の姿は見られなくなってしまいました。昭和 48（1973）年に、水車川が埋め立てられた後、昭和 53（1978）年には、遊歩道として使われるようになりました。旭小学校には復元された水車があり、地域や子どもたちにまちの歴史を伝えています。

毎年 8 月に行われる「鉄一が里とよひらふれあいまつり」は地域の子どもたちや学生らをはじめ、多くの参加者でにぎわいます。

防災の取り組みは特に盛んで、毎年開催している避難所運営訓練では、地区全体から多くの方々が参加しています。

さらに、歴史講演会や歴史巡りを通じ、地域の歴史を次世代へ伝承する取り組みや、リンゴをかたどった交通安全マスコットを小学校の新一年生へ配布するなど、温もりのある地域づくりを進めています。

写真 -4　豊平地区基幹避難所運営訓練（令和 4 年）

2　美園（みその）地区

この地域には、明治 6（1873）年に石川県の人々が移住してきました。同 11（1878）年から水田を作り、早くから米作に成功した地域で、開拓当時は「望月寒川沿（もつきさっぷかわぞい）」と称していました。

昭和 19（1944）年に豊平町議会で「御園」と字名が変更されましたが、その後すぐに、現在の「美園」に修正されています。当時は、この地域で花き栽培をしている農家が多くみられ、春から秋にかけて花園のように花畑が広がっていたことから、「美園」と名付けられたといわれています。

戦後は、旧陸軍の射撃場跡に引揚者のための住宅が建つと、札幌市の発展ともあいまって、戦前は 100 戸に満たない集落だったものが、昭和 40（1965）年にはおよそ 6,200 戸となり、美園は新興住宅地として急激な変貌を遂げました。

また、昭和 28（1953）年には別名「弾丸道路」と呼ばれる国道 36 号が完全舗装化され、昭和 31（1956）年には定鉄バスが月寒公園下～札幌駅間の運行を始めるなど、美園地域の交通事情も発展していきました。

地域の人口増加に合わせるように、昭和 30（1955）年に美園小学校と八条中学校が、同 34（1959）年には豊園小学校が開校しました。また、美園地区町内会連合会の前身となる「美園自治会連絡協議会」も昭和 34 年に設立されました。

昭和 63（1988）年には、美園連絡所・美園児童会館・美園会館が複合施設として完成し、平成 6（1994）年には地下鉄東豊線が福住駅まで延長されて、美園駅が誕生しました。

写真 -1　美園連絡所（昭和 38 年）

明治 14（1881）年、ヨーロッパ種としては日本初のリンゴが平岸村に実り、その後、平岸リンゴの名は日本中はもとより、シベリアやシンガポールにまで聞こえるようになりました。

戦後、札幌市の急激な都市化の波が平岸地区にもおよぶと、由緒ある平岸リンゴは次第にその姿を消していきました。昭和 49（1974）年、当時の板垣市長の提案により、街路にリンゴなどの実のなる木を植えることを検討することとなり、リンゴの果樹園があった美園地区の環状通中央分離帯に植樹することが決定され、同年 11 月に 80 本のリンゴの木が植えられました。（27 ～ 28 ページ参照）

写真 -2　環状通のリンゴ並木（昭和 50 年）

しかし、植樹を行った翌年の昭和 50（1975）年、初めて実をつけたリンゴが 1 週間ほどでなくなってしまうという残念な出来事が発生。これを契機に、地域でリンゴ並木を守ろうとの機運が高まり、昭和 51（1976）年 2 月に「美園リンゴ会」が結成されました。同会は現在もリンゴ並木の見守りや、環状通での植花活動など、美園地区の環境美化活動に加え、地域でのさまざまな活動にも協力しています。

写真 -3　リンゴ並木の碑（美園 11 条 7 丁目）

昭和51（1976）年、環状通のリンゴ並木の初収穫を祝う「豊平区民のつどい　第1回リンゴまつり」が開催され、リンゴみこしが区内を回った他、音楽隊のパレードなどが行われ大いににぎわいました。このお祭りは平成11（1999）年に終了しましたが、平成13（2001）年からは「美園リンゴまつり」として、地域のさまざまな団体と協力して開催されています。なお、令和2（2020）年から令和4（2022）年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、美園リンゴまつりも中止されていましたが、感染も収まった令和5（2023）年から再開することとし、「美園りんごマルシェ」という新しい形で再出発しました。

写真-4　豊平区民のつどい第1回リンゴまつり

写真-5　りんごマラソン（平成9年）

写真-6　美園りんごマルシェ（令和5年）

3　月寒地区

月寒地区は、明治4（1871）年に現在の岩手県から44戸（43戸の説もある）185人が移住し、明治35（1902）年に豊平村と合併するまでは、「月寒村」と呼ばれていました。

月寒の語源は、アイヌ語の「チ・キサ・プ」（われらが木をこするもの）という説と、「チ・ケシ・サプ」（丘の外れの下り坂）という説があります。月寒は「つきさっぷ」と読まれていましたが、北部軍司令部ができたとき、「つきさむ」と読むよう軍命令があったといわれています。また、移り住むようになった住民たちが「つきさむ」と読むことが多くなり、昭和19（1944）年、豊平町議会で「つきさむ」と読むことに決定し、その年の10月に道庁から正式に告示されました。

明治29（1896）年に、旧陸軍歩兵第25連隊が置かれ、およそ1,700人の兵隊が入営したことにより当時2,500人だった月寒村の人口は飛躍的に増加し、兵営の周辺には日用品や飲食店などの商店が並びました。明治43（1910）年には豊平町役場が移転されるなど、古くから豊平町の中心地として発展しました。また、この時の役場の移転に伴い、平岸と月寒をつなぐ「アンパン道路」が住民と軍隊の協力によって造られ、現在もその名を残しています。昭和28（1953）年には、当時北海道で初となるアスファルト舗装された国道36号も完成しています。

昭和36（1961）年に豊平町と札幌市が合併すると市役所月寒支所が置かれました。同じ年に、かつて軍の射撃場であった土地が総合公園として整備され月寒公園となり、現在も市民の憩いの場となっています。また、かつての陸軍練兵場であり昭和35

写真-1　月寒公園（昭和37年）

（1960）年まで道営札幌競輪場、その後市営月寒スケート場として利用されていた跡地は、昭和 46（1971）年に月寒屋内スケート競技場（現在の月寒体育館）としてオープンし、翌年の札幌冬季オリンピックのアイスホッケー試合会場となり熱戦が繰り広げられました。

昭和 47（1972）年に札幌市が政令指定都市となると、月寒支所は豊平区役所仮庁舎となり、同 49（1974）年に現在の平岸 6 条 10 丁目に庁舎が移転した後、月寒には月寒連絡所が設置されました。

写真 -2　豊平町役場周辺（昭和 35 年ごろ）

昭和 60（1985）年には、旧北部軍司令官官邸を保存するため「つきさっぷ郷土資料館」を開館し、旧陸軍関係の資料のほか開拓当時の生活用具など月寒の歴史を物語る貴重な品々を数多く展示しています。なお、上述の「アンパン道路」と「つきさっぷ郷土資料館」はともに昭和 63（1988）年にさっぽろ文化百選に選ばれています。

平成 6（1994）年には地下鉄東豊線が福住まで延長されたことに伴い、国道 36 号沿いに月寒中央駅が開設され、交通の便が良くなりました。

写真 -3　月寒体育館（令和 4 年）

月寒地区では「みんながいきいき　にぎわいある月寒のまち」をテーマに掲げ、高齢者から若い世代、子どもまでが健康に生き生きと暮らすことができるまちを目指しています。単身高齢者の見守り活動の他、子育てサロンや地域食堂などによって、高齢者や子どもにやさしく、また世代間交流の場を設けることにも積極的に取り組んでいます。

さらには、夏まつり「フェスタつきさっぷ」や秋の音楽行事「親子ふれあいコンサート」、冬のイベント「ホワイトジャンボフェスタ」など、地域住民の交流と月寒地区の活性化を図るさまざまな取り組みが行われています。また、地域の情報を集約し広く知ってもらうため開設したポータルサイト「つきさっぷ」に加えて、ＳＮＳなどで情報発信を行い、若い世代がまちづくりに参加するきっかけとなるよう取り組んでいます。

写真 -4　フェスタつきさっぷ（令和 5 年）

写真 -5　ホワイトジャンボフェスタ（令和 2 年）

4　平岸地区

平岸という地名は、アイヌ語の「ピラ・ケシ・イ」（崖の・尻の・ところ）から名付けられたものです。

平岸地区は、明治 4（1871）年に岩手県から 65 戸（62 戸の説もある）203 人が移住しました。当時は、製網の原料である麻の栽培が盛んだったため、「麻畑」とも呼ばれていました。

写真 -1　用水堀があったころの平岸通（明治 44 年）

「平岸リンゴ」の名で知られているリンゴの栽培は、明治初期に開拓使がナシやサクランボなどと一緒に苗木を配布したことから始められ、その後、リンゴの栽培面積が増えていきました。

生活する上で欠かすことのできない「水」は、開拓当時、毎日豊平川までくみに行っていました。しかし、それでは農作物などに必要な水も不足するので、村民全員の努力と奉仕により「平岸掘割（ほりわり）（用水堀）」を完成させました。この用水掘は、精進川取水口から水を取り入れ、天神山のふもとを経由して、平岸通（平岸街道）の真ん中を流して豊平川につながっていました。全長約 5.3km の用水堀を、約 40 日間で完成させたといわれています。この堀は、平岸通の拡幅のため昭和 36（1961）年に埋め立てられました。平成 5（1993）年に国道となった現在の平岸通は、南区真駒内方面に抜ける幹線道路として交通量が多く、道路沿いには大型商業施設や商店が立ち並び、にぎわいを見せています。

また、平岸には、北海道で最初の公団住宅「木の花（このはな）団地」があります。日本住宅公団（現在の独立行政法人都市再生機構）が建設したもので、当時、近代的な住宅として人気がありました。平成以降、地区内では総合病院が建て替えられた他、高齢者施設が新設されるなど医療や福祉の施設も充実しており、令和 5（2023）年現在も、地下鉄南北線沿線を中心にマンションなどの集合住宅が増えている地域となっています。

平成 30（2018）年 12 月、平岸通沿いの雑居ビルで大量のスプレー缶によるガス爆発が起こり、52 名が負傷し、41 棟の建物が損壊するなどの被害が発生する事故がありました。重傷者はいなかったものの、住居の損壊や停電などのため生活に支障が生じた多くの方が平岸会館に一時滞在しました。

夏は夕やけ公園を会場に「平岸郷土芸能祭」が開催され、迫力ある平岸天神太鼓や平岸天神踊りの披露などのステージイベント、豪華景品が当たるビンゴ大会が行われます。また、地域を走る平岸通は、北海道マラソンのコースになっているほか YOSAKOI（よさこい）ソーラン祭りの会場のひとつにもなっており、商店街や町内会をはじめとする地域の方々が運営に協力して祭りを盛り上げています。

写真 -2　北海道マラソンの給水ボランティア（令和 5 年）

地区では福祉活動も活発に行っており、「ふれあいネットワーク平岸」（平岸地区福祉のまち推進センター）が、ボランティアによる相談窓口、子育てサロン「なかよしくらぶ」を定期的に開催するなど、少子高齢社会でのニーズに沿った事業を行っています。

また、札幌市は、平岸駅周辺地区を市内における地域交流拠点のひとつとして位置付け、令和元（2019）年に、「平岸まちづくり指針」を策定し、その取り組みをさらに推進するために令和 5（2023）年に「平岸駅周辺地区地区計画」を策定しました。平岸地区の地域資源を生かしながら、地域の魅力をさらに高めるまちづくりが進められることとなっています。

5　中の島地区

中の島は、豊平川とその支流である精進川に囲まれた大きな中島であったことから付けられた名前です。明治時代は「中河原」、大正時代には「中島」と呼ばれていました。昭和８（1933）年ころから、「中の島」と呼ばれるようになりました。

中の島の開拓は、明治 15（1882）年ころから始まりました。この辺りは川に囲まれた中島であるために、大きな石や砂利が多く、農耕地としては適していませんでした。また、たびたび豊平川が氾濫したため、この一帯は洪水に悩まされていました。

写真 -1　初代幌平橋
（昭和２年～ 12 年）

昭和５（1930）年に豊平川の堤防が完成し、洪水の心配が少なくなり、平岸と地続きになりました。昭和２(1927）年に完成した幌平橋や、平岸本村とを結ぶ道路の開通により、住民の行き来が容易になりました。洪水対策としては、その後、昭和 46（1971）年に精進川から豊平川への排水のために精進川放水路が作られました。

中の島は農耕地としては適していませんでしたが、明治から大正にかけてリンゴやブドウなどの果樹栽培が始まり、大正・昭和初期から戦中にかけては、養鶏が盛んに行われました。また、きれいな水を生かし、さけ・ますのふ化（37 ページ参照）や製氷（44 ページ参照）が行われていましたが、いずれも戦後の宅地化とともに姿を消していきました。

中の島にある「北海道自動車学校」は道内で最も古くからの実績を誇る自動車学校です。その歴史は、大正 13（1924）年、伏木田隆作（ふしきだりゅうさく）氏が中央区の自宅に開設した「自動車運転技能教授所」に始まります。昭和６（1931）年に市内の自動車学校を統合して現在地に「北海道協立自動車学校」を開校し、同 18（1943）年に現在の名称となりました。その後、昭和 40（1965）年にそれまで砂利道だった教習コースは、約１万６千㎡の完全舗装に生まれ変わり現在に至ります。

写真 -2　三輪自動車の練習風景（昭和 29 年）

精進川はかつてはコンクリート護岸の単調な川でしたが、平成４（1992）年から北海道の「ふるさとの川整備事業」として再改修事業が行われました。この事業により、既設の護岸を取り壊し、公園や住宅地などと調和した多自然型川づくりが進められ、精進川は地域住民の憩いの場となりました。

昭和 46（1971）年、地下鉄南北線が開通して以来、中の島は、中の島駅から大通駅までは６分、札幌駅まで８分と利便性の高い住宅地として発展してきましたが、一方で都心近くにありながら豊かな自然が味わえるまちとなっています。

写真 -3　精進川（令和４年）

中の島地区町内会連合会は、昭和 54（1979）年、地域の急速な発展に対応するため、平岸地区町内会連合会から分離し、参加３町内会（１区～３区）で発足しました。昭和 55（1980）年から昭和 57（1982）年にかけてそれぞれの町内会が細分し、全体で 10 単位町内会となり現在に至っています。また、町内会、小中学校などがメンバーとなり平成５（1993）

年に「中の島魅力づくりの会」が発足（平成 20（2008）年「中の島魅力ある地域づくりの会」に改組）され、魅力ある地域づくりのためさまざまな事業を実施してきました。

毎年 5 月には、精進川で「ヤマメの稚魚放流」が行われています。この事業は地域住民の自然愛護や環境保全意識の向上のため、平成 10（1998）年から実施されており、秋には体長 20 ～ 30㎝に成長したヤマメがサクラマスとして川に戻ってくる姿を目にすることができます。

写真 -4　ヤマメの稚魚放流（平成 29 年）

また、冬には「中の島アイスキャンドル大作戦」を実施しています。この事業は平成 21（2009）年から実施されており、厳冬期にアイスキャンドルの雪あかりを住民と各種団体、関係機関が協働して灯すことにより、地域の連帯感を創出するとともに世代間の交流が深められています。

写真 -5　中の島アイスキャンドル大作戦（令和 5 年）

6　西岡地区

西岡地区の開拓は、月寒村の一地区として明治 22（1889）年ころに始まり、当時は「焼山」と呼ばれていました。これは、開墾の火が周辺の森林に飛び火して、たびたび山火事が発生したために、この名が付けられたようです。その後、明治 42（1909）年に「西山」と改称され、さらに、昭和 19（1944）年に現在の「西岡」に改称されました。月寒地区の西に位置し、丘陵地帯になっているので「西」に「山」または「岡」をつけたものです。

この地域は、火山灰に覆われた土地であったため、開拓当初の農業経営は苦労を強いられました。明治 30 年代後半になると、ビールの原料となるホップの栽培が盛んになり、ビール会社の工場に出荷されていました。また、大正時代にはジャガイモ（焼山芋（いも））も栽培され、海外に輸出された時期もありました。

写真 -1　ホップ摘み（昭和 37 年）

戦後も種イモなどの農業が盛んに行われていましたが、道路の開通や路線バスの運行開始などにより、徐々に宅地化・都市化が進み始めました。昭和 36（1961）年の豊平町の札幌市との合併を契機に、昭和 39（1964）年に団地造成が始まり、人口が急増し、宅地化が進みました。

西岡水源池は月寒にあった陸軍への給水のために月寒川をせき止めた大きな貯水池でしたが、昭和 52（1977）年に西岡公園として整備され、現在は、川や池沼・湿地などの豊かな水環境を有する公園として、四季を通じてさまざまな生き物と出会える憩いの場所となっています。

平成の半ば以降、区内でもっとも高齢化率の高い地域となった西岡地区では、「ノルディックウオーキング」や「健康づくりセミナー」を開催するなど、健康増進に関する取り組みが積極的に行われるようになりました。また、毎年100人規模で開催される「パークゴルフ大会」や敬老の日にちなんで9月に行われる「ふれ愛交流会」にも、毎回たくさんの人が集まり、高齢者同士の交流の良い機会となっています。

写真 -2　ノルディックウオーキング

一方、地域が主体となって運営している「子育てサロン」による子育て世帯への支援にも力を入れている他、子どもたちの健全育成を願い、各町内会では夏祭りのイベントや子ども神輿（みこし）なども実施しています。

小学校の下校時に合わせて行う「交通安全街頭啓発」は、4月から11月まで地区内4か所で毎月実施し、各町内会や地元企業など1年間で延べ1,000人以上が参加するなど、子どもからお年寄りまで、誰もが安心安全に暮らせる、住みよいまちづくりを目指しています。

写真 -3　交通安全街頭啓発（水源池通）

地域の中心部には札幌大学のキャンパスがあり、令和5（2023）年に初めて、大学の学校祭に町内会や商工振興会が出店協力をする形で、それまでの地域の「夏まつり」の形を変えて「にしおか地区まつり」を開催し、学生や地元の小中学生、地域の家族連れなどたくさんの人でにぎわいました。今後も地域のお祭りとして、継続・発展が期待されています。同じく同大学を会場に、毎年冬にはアイスキャンドルのイベント「西岡まちの灯り」を開催し、地域の人を楽しませています。

写真 -4　にしおか地区まつり（令和5年）

また、特産品を作って西岡を盛り上げようと、商工振興会が中心となってオリジナルの地ビールを開発するなど、新たな試みを積極的に取り入れながら、地域を挙げてまちづくりに取り組んでいます。

写真 -5　西岡まちの灯り（令和5年）

7　福住地区

明治４（1871）年、月寒に移住した開拓移民 44 戸のうち、６戸が月寒川を挟んで東側の少し離れた場所にあったことから、「六軒村」と呼ばれていました。当時は、歩行も困難な密林地帯や、ススキなどが生い茂る湿原が広がっていたことから、「茅野」とも呼ばれていました。その後「月寒西通」と改められ、昭和 19（1944）年に「福住」と改称されました。「福住」の地名は、福住寺 (ふくじゅうじ) にあやかったとも、幸福の住む郷になるようにとの願いから名付けられたともいわれています。

写真 -1　六軒村（明治４年）

開拓以降は農業を中心に発展、天候や地質による豊凶の差や井戸による飲料水などの確保に苦労しながらも、明治時代から月寒川周辺などで稲作が続きました。その他では、ソバ、大豆、小豆、麦などの主食となる作物の作付けから始まり、その後は開拓使以来の奨励作物のビール麦が中心となりました。大正時代には、軍馬の飼料となるエン麦、昭和に入ると、ジャガイモをはじめ、ニンジンやキャベツ、ハクサイなどの野菜が中心でした。

また、大正７（1918）年にリンゴの栽培が本格的に始まり、昭和 25（1950）年頃には最盛期を迎え、平岸と並んで全国に知られるようになりました。

しかし、その後の相次ぐ台風や寒波、リンゴの木の病気などにより、昭和 32（1957）年以降になると、農地が買収され、次々と住宅地の造成が進められました。昭和 45（1970）年には市街化区域に指定され、さらに宅地化が加速しました。

リンゴの木はほとんどなくなりましたが、貯蔵庫であったレンガ倉庫や札幌軟石の倉庫、家畜の飼料を保管していたサイロの中には現存するものもあり、かつて農業が盛んであったことがしのばれます。

平成に入ると、６（1994）年に、地下鉄東豊線の豊水すすきの～福住間が開通。市内中心部や新千歳空港などへの利便性が高くなり、福住駅周辺などでマンションも増え、人口が増加しました。また、通勤・通学などの利用に加え、隣接する札幌ドームや羊ヶ丘展望台へのアクセスの拠点にもなり、毎日多くの人が往来するようになりました。

こうしたことなどから、西岡地区町内会連合会の一部であった福住の町内会は、平成９（1997）年に西岡から分割して福住地区町内会連合会を発足。まちづくりの拠点となる福住まちづくりセンターや福住地区会館、福住開拓記念館も同じ場所に併設されました。

福住開拓記念館では、昔の農機具や馬車など多数の展示物を保存しており、これまでの地域の歴史や当時の暮らしの様子を伺い知ることができます。

福住では、町内会や地区の福祉団体、交通安全関係団体、学校、行政などさまざまな団体と、これらが連携して活動を行うまちづくり協議会などが地区の活動を担っており、防災・防犯、交通安全、高齢者や子どもの見守り、交流や賑わいの創出、環境の美化などのまちづくり活動に取り組んでいます。

写真 -2　福住開拓記念館

交通安全では、通学路を含む道路の安全を守るため、生活道路の一部の範囲について、最高速度を 30km/h 以内に規制する「ゾーン 30」の指定と、平成 25（2013）年からの区

写真 -3　狭さく部（区画線とラバーポール）

画線とラバーポールで車道をあえて狭く見せて速度を低減させる（狭さく部）２つの取り組みを合わせ、令和４（2022）年、北海道内で初めて「ゾーン 30 プラス」として指定され、更なる安全の向上に取り組んでいます。

毎年７月末から８月末頃には、各町内会や町内会連合会による祭りを開催しています。各祭りではさまざまな催しが行われ、連合会や福住厳島神社の祭りでは、子どもたちらによる吹奏楽や和太鼓の演奏なども花を添え、各会場は大いに盛り上がります。

また、大晦日から１月２日まで、アイスキャンドルの点灯が行われ、福住厳島神社と福住まちづくりセンター周辺で優しい明かりが灯されます。

平成 29（2017）年３月、福住では町内会やまちづくり協議会などの団体が一体となり、10 年、20 年先も住み続けたいまちづくりを進めることを目指し、「福住地区まちづくりビジョン」を策定。その際に話し合われた「ふくずみ憲章」も、後に定めました。

しかし、北海道胆振東部地震や新型コロナウイルスのまん延などによる取り巻く環境の変化により、多くの活動が中断・中止となったことを踏まえ、令和５（2023）年から６（2024）年にかけてビジョンの改定に着手するとともにさまざまな活動を見直し、再び 10 年後の未来と、未来の実現に向けた実行内容を策定することとしています。

写真 -4　福住アイスキャンドル（令和５年大晦日）

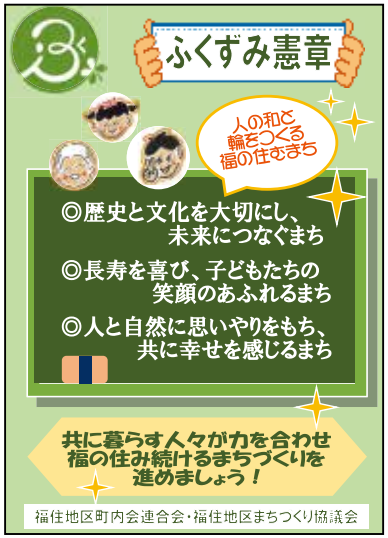

写真 -5　ふくずみ憲章のポスター

8　東月寒地区

月寒地区の東側は、二里塚や八紘（はっこう）の字名で呼ばれていた時期もありましたが、戦後の改称で「東月寒」となりました（現在は、住所では月寒東○条○丁目となっています）。明治から昭和にかけて、牧場が多く開かれた他、農耕も盛んでした。八紘学園資料館は当時この地にあった吉田牧場のサイロと畜舎だった建物です。昭和７（1932）年には、月寒リンクスという 18 ホールの本格的なゴルフ場が誕生し、場内には牧舎のようなおしゃれな作りのクラブハウスがありました。

写真 -1　開校時の八紘学園（昭和９年ごろ）

東月寒地区は昭和 30 年代から宅地化が進み、現在は閑静な住宅街が広がっていますが、八紘学園周辺にはかつての牧歌的な風景を見ることができます。一方で、かつて北海道立産業共進会場として使用されていたドーム施設が平成 28（2016）年に閉館した後、跡地に大型商業施設ができた他、札幌市の新展示場の建設が予定されています。近隣には、令和３(2021）年に日本医療大学月寒本キャンパスが開設されています。

羊ケ丘は、焼山（やけやま）（現在の西岡）の一部でした。明治 39（1906）年に農商務省月寒種牛牧場が創設され、その後、大正８（1919）年には、月寒種羊場が設置されたことから、通称「種羊場」と呼ばれていました。そして、昭和 19（1944）年の字名変更により「羊ケ丘」と改称されました。昭和 24（1949）年に種畜牧場（かつての種牛牧場）は廃止され、翌年から北海道農業試験場畜産部となり、同 41（1966）年には全施設が羊ケ丘に集まりました。ここは、日本の綿羊飼育のさきがけとなった場所でもあります。

羊ケ丘の高台にあるさっぽろ羊ヶ丘展望台では、現在も羊の群れを見ることができ、札幌市内でも人気の観光スポットになっています。平成13（2001）年には、全天候型の札幌ドームが設置され、サッカーやラグビーのワールドカップが開催されるなど、数々のスポーツイベントが行われている他、コンサートや展示場などにも活用され、多くの人が訪れています。

写真 -2　クラーク像と札幌ドーム

ふれあい夏まつりや雪中運動会など、子どもからお年寄りまで楽しく交流を深めるとともに、ふるさとへの愛着を深める行事を行っている他、防犯パトロール隊による地域防犯活動など地域の安全・安心に関わる取り組みにも力を入れています。

写真 -3　ふれあい夏まつり（とんつき憩いの広場）（令和５年）

9　南平岸地区

明治 23（1890）年に現在の平岸小学校の前身である平岸村第二類尋常小学校が開校しました。明治 44（1911）年に完成した平岸と月寒を結んだ「アンパン道路」の起点はこの小学校となっています。南平岸地区は、明治以降、平岸通に開削した用水堀を中心に、果樹園や水田で村が形成されました。平岸でリンゴの栽培が始まると、リンゴ園が広まり、一時は海外まで輸出されるほどのリンゴの一大産地となりました。

写真 -1　南平岸アンパン道路看板

昭和 30 年代以降は宅地化が進み、平岸通の用水堀は埋め立てられ、現在は、商業施設が立ち並ぶ、主要な幹線道路となっています。平岸通から白石藻岩通に入った高台には昭和 15（1940）年に完成した平岸霊園があり、お盆やお彼岸を中心に多くの人々が墓参に訪れます。霊園の隣にはかつて火葬場がありましたが、昭和 59（1984）年に里塚斎場に業務を引き継ぎ役目を終えました。跡地には、平成元（1989）年に平岸プールが造られ、市内で唯一の 50 m長水路コースを完備した温水プールとなっており、数多くの全国大会や国際大会が開催されています。

昭和 46（1971）年に、地下鉄南北線が開業。開業当時、今の南平岸駅は平岸霊園が近かったことから「霊園前」という駅名でしたが、平成６（1994）年に「南平岸」に改称され、「南平岸」の名がより広く知れ渡ることとなりました。地下鉄は、南平岸駅手前で高架となっており、地上を走る地下鉄のシェルターは、南平岸の風景のアクセントになっています。

標高 89 mの天神山は、住宅地に囲まれながらも、四季折々の表情が楽しめる自然豊かな緑地が形成され、住民の憩いの場所となっています。

かつてはこの天神山から一面のリンゴ園を見渡すことができました。西端には丘陵を利用して築いたチャシ(アイヌの砦)跡も発見されており、また斜面前面からは、縄文中期の土器や石器も数多く発見されています。

写真 -2　天神山緑地（令和 3 年）

他にも、北海道最古の藤と言われる樹齢 200 年を超えた天神藤、相馬神社、平岸天満宮・大平山三好神社、石川啄木の歌が刻まれている平岸林檎園記念歌碑、札幌生まれの劇作家・小説家の久保栄文学碑、本願寺道路終点を記した石碑、世界中からのアーティストが滞在しながら作品づくりなどができる天神山アートスタジオなどがあり、見どころがいっぱいです。

写真 -3　天神藤（平成 30 年）

昭和 43（1968）年には北海道テレビ放送（HTB）が開局。隣接する平岸高台公園は、同局の人気番組のロケ地としても全国的に知られています。HTB の社屋は平成 30（2018）年に中央区へ移転してしまいましたが、令和 3（2021）年には、平岸高台公園の園名碑が HTB から寄贈され、いまなお番組ファンの聖地として南平岸地区の名所となっています。

平成 2（1990）年、地域の急速な発展に対応するため、平岸地区町内会連合会にて、南平岸地区の分割決議が行われ、平成 5（1993）年に、南平岸町内会連合会が参加 28 町内会で発足しました。

令和 5（2023）年現在、町内会連合会では、単位町内会間の経験交流や情報交換に力を入れ、特色ある事業を展開しています。住民同士が連携し発災に備える避難所開設研修「避難所チャレンジ」、町内の見どころを散策しながらごみ拾いをする「クリーンウォークみなみひらぎし」や「ごみ減量化・資源化研修会」などの町内美化、異世代交流と地域の魅力発見を目的とした「カルタ交流会」、住民の親睦・交流・健康増進をめざしたウオーキングやパークゴルフのサークル活動などを行っています。

この他、「まちづくり会いきいき南平岸」や「南平岸商店街振興組合」などの取り組みとして、春は地域住民と地元の小中学生が協力して「花いっぱい運動」を行い街並みに彩りを添え、夏は「なんぴら夏祭り」でビアガーデンや縁日、ビンゴ大会などで大いに盛り上がります。また、秋に行われる「天神山文化祭」は地域紹介や交流を目的に JAZZ ライブやダンスなどさまざまな年代の方が楽しめるイベントです。さらに冬は、子どもたちが作ったアイスキャンドルのやわらかい灯りが会場を包み込む「アイスキャンドル＠南平岸」が行われています。

写真 -4　クリーンウォークみなみひらぎし